

ベランダの乱

古池麻矢

自分は世のオバさんたちとは決定的に違う。

五十代を目前にして、山村里江子は自分のことをこのように評価している。

どこが決定的なのかと言うと、基本他人の生活に興味がないところだ。

だから覗き趣味など微塵も持ち合わせていない。単に「自分が一番人間」だからだと
言えなくもないが。

東隣に住むAさんの娘さんが携帯でやりとりしている一部始終を聞いてしまったのは、
たまたまその時、エアコンの排水ホースを修理するのに手間取ってベランダから動けな
かっただけだ。

明るい茶色に染めた髪に、パープル系のアイシャドウ。一見派手な印象のそのお嬢さ
んは、恋人とのやり取りを同居する親に聞かれたくなかったのだろう。ベランダに出
てこっそり話しているつもりだったらしい。

里江子たちが住んでいる賃貸マンションは全室南向き、管理室も防犯カメラもなく、
近頃空室が目立つ築二十年弱の物件だが、防音だけはほとんど完璧で、窓を閉めてしま
えば人の話し声はおるかテレビの音声すらも外には聞こえない。

もし強盗に殺されそうになって、必死に助けると叫んでも、誰も気が付かないだろう
と里江子は確信している。が、ひとたびベランダに出てしまえば、情けないほど話し声
は筒抜けになる。

彼氏の浮気が原因で若い二人の仲がもう終わろうとしていることなど、決して知りた
いことじゃない。だから最初は聞くまいとしたが、話が進むにつれどうやら、泣き声で
抗議する彼女の、かわいい妬きもちであるらしいと分かった。そこからはお耳がダンボ
で二人が仲直りするところまで聞いてしまった。

しかしその翌日から朝のゴミ出しのときなど、Aさんたちと顔を合わせるのが少々気
まづくなった。これでも愛想はいい方だと思う（良すぎるとの批判もある）。隣人を前
にして澄まし顔する柄でもないので一応笑顔は作るが、多少ひきつる。「おはようござ
います」と言ったあとの言葉が続かない。

八時半までに出す規則のゴミを、わざと九時過ぎに出しに行った。いつも遅れ気味の
収集だが、運悪くゴミ集積場のゴミはすべて時間通りに回収されたあとで、出し損ねた
ゴミ袋を手のため息をつく。

残されたカラス避けネットはまだ片付けられておらず、中で何かがうごめいている。野良の子猫がネットに引っ掛かりもがいていたのだ。そっと持ち上げるとやすやすと網はずれ、猫は道路を斜めにダッシュして逃げて行った。助けてやったのに、まるで、私がいじめようとしたみたいじゃないかと気落ちする。別に礼を言っただけじゃないが。

そんなことがあって得た教訓、見ざる聞かざる。知ってしまったと忘れられなくなる。以来、ベランダでの用事もなるべく手短に、隣人が出てくる気配がしたら例えば洗濯物干しが途中でそそくさと引っ込むようにしていた。

緑川さん一家が、引っ越しの挨拶に来るまでは。

西隣の部屋に新しく入居した緑川さん一家は、二歳くらいの女の子と、眼鏡はかけているが、なかなか美人の奥さんと、やせぎすで愛想のないご主人との三人だった。挨拶は奥さんの一言と熨斗のついたハンドタオルで終わった。緑川という名前と相俟って、この一家は昔の怪奇小説を連想させた。

それは九月下旬。日中はまだ暑かったが、日が沈むと同時に秋の虫達が総出で涼しい音色を奏でるようになった頃。夜中の一時過ぎだったろうか、激しく咳き込む声と、喉からんだものをどうにか搾り出そうとするような、大きな咳払いで里江子は目を覚ました。

就寝時にはまだ開けておく小窓を通して左隣から聞こえてくる。男の声だから、緑川さんのご主人であることは間違いない。これだけ大きく聞こえるのだから、窓を開けて外に向かって咳をしているのだろう。十分か二十分か——断続的にその声は続いた。なかなか痰が切れならしい。緑川氏の体型やその顔色の青白さが思い出されて、「もしかして肺病病み？」という考えが芽生えた。

翌朝、息子二人を順番に送り出した後、その日現場直行の夫がのんびり広げている新聞の上に顔を突っ込むようにして、この話題を切り出した。

「緑川さんのご主人ね。夜中にひどい咳だったわね。あたし目を覚ましちゃった。」

夫は、並んだ株式銘柄の上に麗しき妻の顔を差し出されて不機嫌そうに言った。「おれは知らないよ。だからどうだ？ 咳ぐらいするだろ？」

あんたのいびきとの二重奏だから目を覚ましやすいのだと言いたいが、やめておく。「それが、へーんな咳なのよ、血痰かなんかからんだような。あのご主人病気じゃないかしら。」

また結核が密かに広まりつつあると一頃仕切りに報道されていた。不治の病ではなく

なったとは言え、一度発病すると完治するまでかなりの期間を要するらしい。若い人に感染し易いとも聞く。里江子も中学生と高校生の子を持つ母なので、もしものことを考える。夫は血痰の意味がわからなかったようだ。

「風邪だろ。」

「結核だったらどうするのよ。うつったら大変よ。」

「おまえは栄養過多だから、結核なんか感染するわけない。」

「子供たちのことを心配してるわけよ。」

「勝手に結核なんて決めつけて差別だぞ。第一今時結核なんかあるわけないだろ。あつたにしたって、スパトラミ……じゃない、ストライプマイシンだかなんだか特効薬ができてから結核で死ぬやつなんかいないの。」

「ストマイでしょ。あなた古いわね。ちっちゃな女の子がいるのよ。あの子は大丈夫かしら?。」

夫をけなしたが、ストマイの正しい名称は里江子もすぐ思い出せない。

「じゃあ、直接本人に聞いてみたら。それが一番確かだろ? じゃ、行ってくるよ。」

夫は、新聞をたたむとさっさと出て行った。「行ってらっしゃい。」のあとで里江子は「聞けるわけねーだろ。」と毒づく。最近息子たちの言い回しが伝染している。

でも言われて思い出した。その昔この病気の者を出したというだけで、一族の大変な問題になったのだという話しを。うかつに口にしたら奥さんや子供に迷惑をかけてしまうかもしれない。「いけない、いけない。」とつぶやいた。がやはり気にはなる。

かくして覗き趣味のない彼女も緑川さんには注意を払わないわけにはいかなかった。その後二、三度夜中に咳き込むのが聞こえたが最初の晩ほどではなかった。そのうちほとんど聞こえなくなつたにもかかわらず、疑念が消えてしまう訳ではない。ベランダに出ている時は、緑川さんの方から何か聞こえては来ないかと、洗濯物を干す手を止めて耳を澄ます。

そうしているうちに、何故か緑川氏は日中もよく在宅であることが分かった。昼ごろ出勤する姿を見かけたことはあるが、時差出勤であるのか、不規則な勤務形態なのか。夜は必ず居るようだから、夜勤の仕事ではないことは確かだ。やはり病氣療養中?

最初は、女の子の笑い声や泣き声、それをあやす母親の優しくかほそい声ばかりが聞こえた。片言で仕切りに何かを母に告げようとしている、幼い声を聞くと里江子の顔にも自然と笑みが上る。男の子ばかり二人(亭主を入れて三人)を相手にほとんど怒鳴り声ばかり立てて来た自分との違いを考える。

あんなに綺麗で優しい奥さんがどういう経緯で、あの顔色の悪い男と家庭を持つに至

ったのか。まあ美人って、ちょっと分からない男とくつつく傾向にあるからと勝手に納得する。

幸いにも女の子は母親似で愛らしい。

ある日の朝、郵便物を取りに行こうとドアから出ると、通路に母娘が居た。女の子は柔らかい長めの髪を左右で結んで、フリルのついたピンクのスカートをはいている。お出かけらしく母親の周りを跳ね回ってはしゃいでいる。笑顔の夫人と目礼を交わした。

里江子は女の子の前にしゃがみ込むと自分の握りこぶしをマイクに仕立てて、「お名前は何ですか？」と聞いてみた。女の子は恥ずかしがって母親の後ろに隠れた。

「留美ちゃん。名前はなあにだって。ほら。」

母親に促されても留美ちゃんは、両手でスカートの端をつかんだまま、何も言えないでいる。里江子はもう一度握りこぶしマイクを彼女に差し出した。

「ルミちゃんって言うの？」

彼女はうなずいた。里江子はこぶしで自分の胸をとんとたたいた。

「私は隣のおばちゃんです。おばちゃんって呼んでね。」

首を横に傾げて、にやっと笑ってそう言うと、女の子もすこし笑顔になってまたうなずいた。

ここから、おばさん攻撃が始まってしまった。あー『留美』って書くのね。ほんとかわいいわね。もう二歳半になるの。おとなしくてとってもいい子ね。女の子っていいわ。うちのどら息子ととりかえて欲しいわ。

緑川さんの奥さんは口数の少ない人らしく、ほほえみながら主に聞き手になる。優に十五分は引き止められた後、会釈しながら彼女たちは出掛けて行った。

彼らが背を向けた瞬間、里江子はスレンダーな緑川夫人の身体に二人目の子の存在を感じた。

秋の深まるのは早いようで遅く、冷たい風が吹いてコートを出そうと思った翌日には、春のようにうららかな日があり、霧雨が一週間近く続いて洗濯物が悩みのたねとなる。

緑川さんが来て一ヶ月以上が過ぎたが、里江子の願いもむなしく、あれから留美ちゃんに話しかけるチャンスはなかった。

ベランダから聞こえる、子供の笑い声に泣き声が混ざることが多くなった気がする。ただずっと泣いている声が聞こえたこともあった。ご機嫌が悪いのかしらと里江子は思った。特に十一月に入り、部屋の空気を入れ替える時以外は窓を開け放つこともないの
で、はつきりとは判らない。

たまに母娘を見かけて言葉を交わすが、留美ちゃんは人見知りをするものの、歌いながらはねたりして元気な様子だった。おばちゃんと声をかけてくれるのももうすぐだろう。二歳ともなればおとなしい子でもだだをこねることくらいある。そのうち、「おばちゃんち」に遊びに来るように誘ってみるつもりだった。

何度か緑川氏が仕事に出かけるのを見かけたことがある。里江子がほほえんで会釈をしても、急いでいるのかそっぽを向いて行ってしまう。バス停から歩いてくるのに鉢合せしたときはさすがに里江子を見無視できなかつたらしく、小声で挨拶の言葉を返した。ひどい仏頂面で。

そう思った次の日の午後、窓際近くに置かれたテレビの前に寝そべって、しどけなくワイドショーを見ていると、また泣き声が聞こえたような気がした。こっそり這って行ってサッシを五センチばかり開けて隣に耳を傾ける。隣のベランダで女の子は火のつくような激しさに泣いていた。

「ごめんなさい。もうしません。ごめんなさい。」

しゃくりあげる中から舌足らずな声で彼女は必死でこんなことを言っていた。男の声と言った。

「いい子にする？ いい子にするって言いなさい！」

「いい子します。ごめんなさい。」

網戸とサッシを同時に開ける音がして、どうやら留美ちゃんは家の中に入れてもらえたらしかった。サッシを閉めてしまえばあとは何も聞こえない。

里江子は嫌な気分だった。あんなちっちゃいんだもの、ベランダに出されて戸を閉められてしまったらさぞかし怖いだろう。まだ泣いてるかな？ ちょっとやりすぎじゃないかしら、あのはにかみやさんが外に出されるほどひどいはずらをするとは思えない。朝晩は冷え込む季節とはいえ微妙に暖かい日もある、この辺りは周囲に林など点在するので時々羽虫の類がベランダの植木の周囲を飛び交っていたりする。まだ蚊も出る。留美ちゃんが蚊にさされたのではないかと心配だ。

里江子は長男が幼稚園年少で次男がまだおむつをつけていた頃のことを思い出した。このマンションに来るずっと前で地方の戸建てに住んでいた。

兄弟は何箇所か破れている障子を両側から挟んで、お互いを開いている穴から探してこする遊びを思いついたらしい。「優くんここだよ！」などと言いながら、長男は穴から向こう側にいる弟に声をかける。次男の方は「にーたん」といいながらその兄が見えろと思われる破れ目を探す。その時には、にーたんの方は別の破れ目の方に移動してい

る。「いない」と次男が言うのと、また長男が「ここだよ」と弟を呼ぶ。

仲良く遊んでいると安心して、台所に立つこと二十分足らず、しばらくして兄弟の方を見やると、次男の方はなかなか兄が見つからないのに剛を煮やしたのか、でたために小さな手を障子のあちこちにずぼっと突っ込んで視き込み、「にーたんみつけ」などとやって笑っている。

ときすでに遅く障子は穴だらけになっていて、もう相手がすっかり見えてしまっているのに二人の暴走はとまらない。

「こらっ！」

里江子が駆け寄ると、二人はきゃっきゃつと笑いながら逃げる。今より〇〇キロ軽かった母はあつという間に二人を捕まえて、正座させて説教しようとしたが、五秒とじっとしていない。

「しばらく入ってなさい！」

里江子は二人をまとめて抱きかかえると、押入れの布団の隙間に押し込んで、ふすまにつっかい棒をしてしまった。次男は泣き出したが、長男はまだ笑っていた。

「ごめんなさいって言うまで、出してあげないよ。」

そうドスを利かせて、しばらくしてから行ってみると押入れからは何の声も聞こえない。開けると、幼い兄弟は顔を寄せ合ってすやすやと寝入っていた。年の瀬が押し迫った頃で、押入れの中が暖かく心地良かったのだろう。

その二人の様子が目に浮かぶ。切り貼りだけで済むと思っていた障子二枚を張り替えなければならず、あの時はあんなに腹を立てたはずなのに、今思い出すとかわいかったなとため息が出る。

このマンションほどの部屋にも障子はない。留美ちゃんが父親に叱られる理由ってなんだろう。花瓶を倒したとか、コップを割ったとかその程度のことしか思い浮かばない。うちの息子たちみたいに壁いっぱいに落書きするなんて考えられない。

「まったく、ちまちましましたことで、怒鳴り声を上げる近頃の若い父親って何なのかしら。」
そう勝手に決め付けるとますます腹が立ってくるのだった。

その後しばらく静かな日々が続いた。

やはり他人の子供のしつけにまで口を出すべきではない、考えないようにしようと思う。そう思うとまた頻繁に泣き声を聞く日が続くようになる。

あるいは、泣き声かなと思って家事の手を休めると、空耳だったりもする。そんなことが一週間に一度くらいだったものが三日に一度というように、頻度は増えているよう

だ。気にするから増えるのだろうか。

そのうち何度かはかつてのようにベランダに出されているようだった。ベランダで最初はパパといって泣いていたが、ママと言って泣いているのを聞くようになった。

にもかかわらず、かつてのように母親の優しくなだめる声はあまり聞こえない。父親の怒る声ばかりが耳に付く。「うるさい！」という怒鳴り声がサッシを閉めているにもかかわらず聞こえてきた。例によって里江子は窓を少し開けてみた。その日は少し風が強く気温もかなり低い。

「てめーの声の方がよっぽどうるさいんだよ。子供が寒がってるじゃないか！」

と聞こえないように独り言を言っていると、女の子はまたベランダに出されてしまったらしい。彼女は激しく泣く。男の声。

「いい子にするって言っただろ。いい子にするか？ ああ？」

留美ちゃんはまだもう謝らなかつた。

「ママ、ママ！」

と母親を呼んでいる。父親はさらに怒鳴り声を上げたが、留美ちゃんは泣きながら母親を呼び続けた。やがて母親がやってきたのか、サッシのしまる音がして泣き声は部屋の中になくなった。

気のせいではない、何か行動を起こさなければいけないのだろうか？

たまに緑川夫人を通路で見かけるたび彼女のお腹は順調に目立つようになった。多分検診等で留美ちゃんを父親に預けて出かけることが多くなったのだろう。あるいは妊娠中の体調があまり良くないタイプで子供の世話もままならないのかもしれない。身重の人を責めるようなことをするわけにはいかないと考え直す。

二月になってすぐ、多分もう臨月だと思われる頃、ドアを開けると、緑川夫人は一人で出かけようとしていた。検診なのだろう。背後からそれとなく話しかけた。

「おはようございます。寒いわね。これからお医者さん？」

「はい。もうすぐ予定日なんですよ。」

「まあそう。緑川さん小顔だし、手足も細いままだから全然そんなふうに見えないわね。どっちかもう分かったの？」

「ええ、男の子みたいです。」

「まあ、一姫二太郎ね。」

つまらない会話だ。われながら嫌になる。本当は聞かなければいけないことがいっぱいあるのに。でも診察に行こうとする人を引き止めて長話することはできない。里江子

は焦った。

「お産はご実家でなさるの?」

「いいえ、実家は遠いので、K産婦人科にお世話になることになってます。」

「じゃあ、お母さんがこちらにいらっしやるのね。」

「母は今ちよつと体を悪くしてて。父ではちよつと……。」

「ああ、そうだったの。余計なこと言っつて、ごめんなさい。それじゃ大変ね。私でできることがあつたら、言つてね。緑川さんとこはご夫婦ともに細かいから、体に注意しなくちゃね。ご主人は風邪をひきやすいみたいですものね。」

無理やりご主人の話にもつていく。緑川夫人は顔を少し曇らせた。

「ええ、喘息があるんで、発作を起こすと咳がうるさいでしょう? すみません。」

「ああ、いえいえ全然うるさいことなんてないけど。」

喘息と聞いて、拍子抜けした里江子が言葉を途切れさせたのをきっかけに、緑川夫人はバスの時間があるからと行つてしまった。咳がうるさいんじゃない、子供を叱る怒鳴り声の問題なのだ。臨月の妊婦を責めるわけにはいかないが、あんなに怒鳴っているのに母親としてどうして止めないの。そう言いたかった。

一週間して、緑川さん一家の姿を見かけなくなった。奥さんがK医院に入院して緑川氏と留美ちゃんはご主人の実家にでも滞在しているのだろうか? 当然男は仕事に出なければならぬだろうからその間留美ちゃんを見てくれる人が必要だ。

しくじつたと里江子は思った。自分が預かると奥さんに早めに申し出てればよかった。この遠慮深い性格がまた自分で嫌になる。トロいんだよと次男は言うが。

何度夫に相談しても、結核の一件から里江子を信用せず「お前の思い過ごした。余計なおせっかいはするな」の一点張りだ。そして「MさんとかPさんとか、お前の友達の連中には話すなよ。」と続く。

一週間ほどすると、誰かが隣室に戻ってきた気配がし出した。その日ごみ出しの時に、緑川さんと留美ちゃんが部屋に入つていくところを見かけた。こちらがドアを開けたのは当然気付いたと思うのだが、会釈する里江子の方を向こうともしない。夫人はまだおらず、留美ちゃんと父親が二人だけのようだ。

これはまずい、絶対まずい。

翌日も朝から、泣き声が聞こえた……:ような気がした。室内で何が起きているのかはほとんどわからない。暴力を受けてなければいいのだが。昨今の児童虐待のニュースを見ると、他者からはわからないように顔を避けて折檻したりするらしい。昨日見かけたときは留美ちゃんを先に部屋に入れていたので、彼女の体に異変がないか確かめるこ

とはできなかった。一度留美ちゃんの姿をよく見てみる必要がある。

そういう考えに到ると、ついに堪忍袋の緒が切れた。自分はおばさんだから、でしゃばる時はでしゃばらなければ。こんなときにおせっかいができなくて、おばさんの存在価値がないではないか。まちがいだったら、間違いでいい。その方がいいのだ。あとで緑川さんに凄まれるくらい何ともない。体重だったらこっちの方が上だ。

深呼吸を一つ、隣室のインターフォンを押してみた。返事がない。さらに押す。やはり応答はない。ほんとに不在なのかも知れないが、中からこちらをのぞき見しているかもしれない。今度はドアを叩く。名を呼んでみる。返事はない。

不燃ゴミ出しを二回に分けたり、暇をみて玄関ドアを開けては隣室を窺った。二人に会えるよう願ったが中々彼らは外に出て来なかった。午後になって買い物に出かけるとき、財布忘れたとつぶやきながら、戻って緑川さんの部屋の前をうろろしている、「でけえケツ。」

と後ろから声をする。ふりむくと長男の隼人だった。

「何やってんだよ?」

あきれ顔だ。彼は三年になって部活もほとんど参加しなくなり、予備校のない日は四時前に帰ってくる。そうだ、夫が駄目ならこいつがいる。里江子は息子の腕をつかむと、そそくさと自分たちの部屋に戻った。すぐに自室にこもろうとするのを捕まえて無理やりダイニングテーブルの椅子に座らせる。

「あんた、緑川さんちのことで何か気が付かなかった?」

「緑川さんてとなりだろ? 興味ねーから、知らない。」

「昼間、よく泣き声が聞こえるのよ。」

「そういえば、奥さんが美人だったね。まだ三〇ちよいだね、あの人。」

「……あんたさすがに最近若い女となると目敏いわね。」

「その言い方ひど過ぎ。」

彼はそう言いながらも少しばかり得意そうに笑った。もうすぐ高三という頃になってやっと隼人にもカノジョができたのだ。ガールフレンドができる年頃になり、この子は母親との世間話に応じるようになっていた。

「奥さんはお産で、今家にいないでしょ。で、留美ちゃんが泣いてばかりいるようなよ。聞こえたことない? どうも父親が折檻してるんじゃないかと思うんだけど。」

「聞いたことねーな。おかんの考え過ぎじゃないの。ガキって泣くもんだし。母親がないから寂しいんだろ。あの子留美ちゃんて言うんだ。かわいいよね。一回見たことあるんだ。」

父親似の息子だと思っただけだが、話を適当にそらす態度は実によく似ている。第一なんだ「おかん」って。関西人かお前は、そんなことはどうだっていいけど。

「児童虐待が増えるって言うじゃないの。考え過ぎですましておけないよ。とにかく勉強しているとき隣から不審な物音とか聞こえないか、気をつけてて。」

「俺たちの部屋、通路側だから何も聞こえねーよ。どっちかつたら優二の部屋の方が近いだろ。あいつ何か言っただけ？」

「あれは、最近『メシ』しか言わないわよ。」

「そうだな。かおりが来ても挨拶もしねーからな。反抗期だな、あいつ。」

「もーお、こうなったら警察だ。それしかない！」

「そんなに心配なら児童相談所にでも報告しといたら。市役所の近くにあるっしょ。」

「児童相談所ね。役に立たないって評判じゃない。調査する権利がないのか、やる気がないのか。」

「警察よりましなんじゃねーの？ コトを大きくしたくないでしょ。はっきりしないうちには。」

息子の言うことに一理あるのを認めざるを得ない。

「あんたもなかなかまっとうなことを言うようになったわね。かおりちゃんみたいな娘をゲットできたのは偶然じゃないね。」

「親父が失敗したのを見てるからね。まあこれも学習能力だよ。」

「失敗したって……。何を？」

里江子が息子の言葉の意味を考えているうちに、隼人は自室に逃げ込んでしまった。事件はその直後に起きた。

とびきり冷たい風の吹く日だった。北風が吹き込むひゅーっという音に、これだけ気密性の高いマンションにもごくわずかな隙間があるのだと言うことを思い知らされる。

夕食用の煮物を早めに仕込むために、台所に立っていた里江子は確かに泣き声を聞いた気がした。キッチンまで外の声が聞こえるはずないのだが。

たまらなくなつて、鍋の火を切ると、サッシを開けて隣に耳を澄ました。やはり、留美ちゃんが泣いている。いままでにない尋常ではない泣き方だ。そして何かを命令している男の声が聞こえる。里江子は急いでサンダルを突っかけて、ベランダの手すりから身を乗り出して隣を窺った。

あろうことか、緑川氏は、留美ちゃんの体をベランダの手すりの上に乘せているではないか。両腕をつかんではいないが、手を離せば簡単に落ちてしまう不安定さだ。強い寒風が留美ちゃんの柔らかい髪を巻き上げている。小さな体は今にも吹き飛ばされてしま

いそうだ。スカートがひらひらして、かわいい下着についたキティちゃんが見え隠れする。これは性的倒錯か？ 快楽のために幼児をいじめているのかもしれないと思って里江子はぞつとした。女の子は怯えて足をばたつかせて大声で泣くだけで何も言葉にならない。

隣のベランダとの仕切りに近づいて里江子が鬼の形相で顔を突き出した時、緑川氏と目が合った。彼は里江子に気が付くと、留美ちゃんを抱きかかえて、あつという間に部屋の中に入って行った。「緑川さん！」と叫んだ里江子の声は風にかき消された。

急いで玄関にまわり、緑川さんのインターホンを押す。何度も押したがやはり応答しない。

里江子は電話帳を繰って、児童相談所に連絡した。「幼児虐待の件で相談したい」と言うと、係りにつないでくれた。はやる気持ちを抑えて、相手の要求するままにこちらの名前と住所電話番号などを告げた。相談員の女性は記録をとっているようで、少し間が空く。待ちきれず里江子は用件を切り出した。

「隣の父親が女の子をですね、ベランダから突き落とそうとしていたんです。私がらみつけたので途中でやめました。中に入ってしまったって私がピンポンしても返事がないんです。中であの子がどんな目に遭っているのかわかりません。すぐ来て下さい、すぐ！お願いします。」

声が震えるのを必死で抑えている里江子に対し、相談員は妙に落ち着き払って言った。

「その父親の名前と子供の名前とわかりますか？」

そんなことどうでもいいじゃないかと出掛かる言葉を抑えて、一通り説明する。考えてみれば留美ちゃんの名前は知っていても夫婦の下の名前は知らない。表札を出していないのだ。

「相手は男なんで、男の人に来てほしいです。何時頃になりますか？」

またメモをとっているらしい相談員に里江子は畳み掛ける。相談員は里江子を見無視するかのように質問を続けた。

「ベランダから突き落とそうとしていたんですね。で、そこは何階ですか？」

「一階です。」

「一階……？」

「一階でも、落ちたら怪我するでしょう？」

「下はコンクリか何かですか。」

「芝生です。あのですね、芝生でも今は半分剥げてるし、頭から落ちたりすると致命傷になるかもしれませんよ。あの子はまだ三歳になるかならないかは？」

相談員は里江子の主張には答えず、実際子供は転落していないということを再確認して、さらに泣き声を聞いた正確な日付とか、暴力を振るわれている場面を見たかとか、子供の体に何か傷があるのに気付いたかとか質問を重ねた。

残念ながらそういう確信や証拠が里江子の側にあるわけではない。が、ベランダから落とそうとするのは、立派な暴力じゃないか。

「とりあえず、緊急性はないものと判断しますが、おっしゃられたことは記録しておきますので、検討します。」

「えっ、来てくれないんですか。」

「いずれ日を改めて、訪問はすることになるかもしれませんが。」

「どうしてですか？ あなたたちが動けないなら警察に連絡してください。何かあってからじゃ遅いんですよ。」

「山村さん。プライバシーの問題って大きいんですよ。親には子供を保護監督する責任があります。当然子供をしつける権利もあるわけで……。私どもが持っているのも権限に過ぎませんし。」

予想していた文句だ。プライバシー？ ○○食らえだわと里江子は聞こえる程度の小声でつぶやいた。相談員はむっとしたらしく、

「いずれにしても相談室は五時で閉まります。今もう四時半過ぎてますので、明日以降ということになりますね。よろしいですか？」

と、電話を切りたい様子だった。

「わかりました。これから警察に電話します。」

里江子は怒りにまかせて受話器を乱暴に置いた。

警察の対応も似たり寄ったりだった。もっとひどかったと言えるかもしれない。一通り事情は聞いたが、これは事件ではないので、我々の管轄ではないと来た。わめく里江子に、パトロールの時くらい様子は見るが、「奥さん、下手に憶測でものを言うとな人権侵害になりますよ」と嫌み。里江子も負けずに、もし留美ちゃんの身に何かあったら、そちらの名前をマスコミに知らせますからと言って電話を切った。もちろんんマスコミに伝手などあるわけではない。

仕込み途中の煮物のことも忘れ、里江子は座り込んだまま、しばらく呆然としていた。

気が付くと時計は六時を回り、すっかり暗くなっていた。

部活を終えた優二が、いつの間にか帰っていて、何か言っている。その声は里江子には聞こえなかった。食事の支度はどうなったか気にしてるのだろう。あの子が気にする

のはそれくらいだ。

夫と次男が食事を終えた頃、隼人が予備校から帰ってきた。珍しく食欲のなさそうな里江子に夫は。

「お前また緑川さんのこと気にしてんじゃないだろうな。人の家庭にやたらと首突っ込むもんじゃないぞ。」

と、釘をさしてきた。夫に今日のことを説明する気はない。説明しても理解しようとする前に決めつけるのだ、夫というものは。

「首なんか突っ込んでないわ。ただドアを蹴っただけよ。」

と言うと、次男が珍しく会話に加わって来た。

「えっほんと！」

「嘘。」

と一言、次男をにらみつけると、里江子は食後のお茶をどんと二人の前に置いた。着替えを済ませた隼人が食卓に着くなり言った。

「隣の奥さん、帰ってきたんだね。赤ちゃんと四人で車から降りるのさっき見た。」

里江子は愕然とした。自分がドアをどんなに叩いても応答がなかったのに、あれからこっそり部屋を出て奥さんと赤ちゃんを迎えにいったのだ。

「で、どんな様子だった。」

「フツー。奥さんが赤ちゃん抱いてて、ダンナが留美ちゃんをだっこしてたよ。」

「父親があの娘をだっこしてた？ 泣いてなかった？ 泣いたようなあとがあったでしょ？」

「暗かったから、わかんねーよ。でも変なところはなかったよ。一応向こうもこっちも会釈したし。」

「……。」

「あ、それよか、来週三者面談だから分かってるよね。木曜日の二時半からだからね。あーめんどくせえなー。」

「分かってる……。」

と答えたもののわが子の進路のことなどすっかり頭から抜けていた。確かに、息子たちは手を離れたとはいえ、まだまだ親の仕事は残っているのだ。

普通の家族に見えたという長男の目撃情報を得て、里江子もしばらく緑川さん一家を見守るしかない。

翌週は長男の進路説明会、個人面談、次男のPTAと続いた。

木曜日、面談を終えたのち、隼人は講習に行き、里江子は買い物をして帰路に着いた。

長男の第一志望大学は私立だ、次男も高校は公立に入るかどうかはつきりしていない。そろそろ、理恵子もパートでも見つけて少しは教育費を貯めておかなくてはならないな。どと考えごとをしながら歩いていった。

ふと顔を上げると、マンションの入り口に引越しの大型トラックが止まっている。

賃貸マンションの入退きのピークは三月初めだ。早めに入居してくる人がいるものだと見ると、荷物はすべて積み込まれていて、エンジンのかかったトラックは今にも出発しようとしている。どうも退去者が出たらしい。

入居した人は挨拶にくるが、出て行く人はだいたい何も告げずに行くので、誰が出て行くとうとしているのかいつもわからない。転勤族が多く、住民同士の交流はあまりない。夕食の準備には少々遅い時間になりかかっていたので、里江子は深く考えず、自宅のドアに急いだ。

その退去者が緑川さん一家であったのに気付いたのは、二日後のことだった。隣が妙に静かだなど思っていたのだが、あまりに人の気配がなく、留美ちゃんの声はおろか新しく生まれた赤ちゃんの泣き声が聞こえない。里帰りでもしているのだろうと気にしないように努めていたが、マンションのフェンスの外からさり気なく見ると、緑川さんの部屋は、カーテンが取り外され、中はすっかり空になっていた。いつ荷造りしたのかまったく気が付かなかった。

こうして里江子のからさわぎは終わった。

マンションの管理会社に、緑川一家の行き先を、理由をこじつけて聞いてみたり、多少はじたばたしたが、当然教えてもらえなかった。児童相談所も警察もその後結局表立った行動は一切しなかった。転居先の児童相談所に報告すべきだろうが、転居先がわからないのだから、どうしようもない。

一家が目の前からいなくなって、何も気にならなくなるほど里江子はさばけた性格ではなかった。幼児虐待の記事がないか新聞の三面記事を毎日念入りに目を通す。

しかしやがて三面記事よりも、求人欄のほうが目につくようになり、中元の季節になって割りのいい期間限定の仕事を見つけた。仕事をするのは久しぶりだったが、もともと人と話をするのは得意で、面接終了後、即採用となった。やがて仕事に熱中した。

何が気に入られたのか、残暑見舞いの時期まで引き止められ、以後も週数日、贈答品売り場での勤務を依頼された。

そしてほとんど緑川さんのことは思い出さなくなっていた。

もうすぐ二学期も間近の夏休みの朝。

父親も、部活の弟も出かけてしまった九時過ぎ、隼人は寝巻きにしている短パンとTシャツ姿のままダイニングに起きてきた。休みの日は一日そんな姿のままである。コーヒーマーカーからマグに暖かいコーヒートを注ぐと、冷凍室から氷を二個取り出して放り込んだ。

母は、テーブルを背に椅子を横向きにして腰掛け、両手で新聞を広げている。

その背がかすかに震えているのが見えた。どうも泣いているらしい。反抗期をとっくに弟に譲り渡した彼がどうしたのと声をかけるより先に、振り返った母の顔を見てとっさに半身になってしまった。

里江子は真っ赤な顔いっぱいにしわを寄せて、必死に涙をこらえ、結果涙の半分は鼻水となって彼女の手にした新聞記事の上にはたばたとたれている。唇がわなわなと震え、ぶふつという音と共に、少し涎まで出ていた。

長男が自分の顔を覗き込んでいるのに気が付いた里江子は、新聞を握りしめたまま、

「大変なの。留美ちゃんのことを記事になってる。緑川さんが、緑川さんが……。」
と震え声で言った。

「緑川さんがどうしたんだよ。子供をいじめてたやつだろ。」

「違うの、留美ちゃんが、留美ちゃんが……。」

「うそ！ あの子ついに殺されちゃったの？ やっぱりおかんの心配したとおりだ。」

「違うの、死んだのは……。」

里江子はこれ以上説明することができなくなって、しゃくりあげながら朝刊を息子に渡した。息子は鼻水で湿った部分に触らないよう慎重に指先でそれを受け取った。

見出し——溺れるわが子を助けようと川へ

『二十四日、S川上流の河川敷において、水遊びに来ていたB市の緑川嘉幸さん家族四人のうち、長女の留美ちゃん（三歳）が流され、助けようと水に飛び込んだ父親でF大文学部準教授の緑川嘉幸さんが行方不明となった。およそ一時間後嘉幸さんは三キロ下流で発見され、搬送先の病院で死亡が確認された。留美ちゃんは居合わせた釣り人たちによって助け出され無事だった。八月に入り連日真夏日が続く中、各地で水難事故が……』

里江子は必死に考えていた。

すべて自分の見当違いで、彼はわが子の為なら自分の命をも顧みない立派な父親だったのか。部屋の中に入れば普通の父親に戻ったのだろうか。

いや、彼の娘を叱るやり方は度を越していたことは事実だ。幼児をいじめた天罰で彼は川に落ちることとなって、それがたまたまわが子を救うためと周囲に勘違いされただけかもしれない。それとも助ける素振りを見せて、体力のない彼は簡単に川に流されてしまった。それを美談に仕立て上げられた？

いずれにしても留美ちゃんが父親に叱られることはもうない。でも彼が彼なりに娘を愛していたのだとすれば、その愛情も失われてしまったことになる。

自分のしたことが間違っているとは思いたくなかった。結論の出ない自問自答が心の中で堂々巡りを続ける。

自分がなぜ泣いているのか分からない。だから泣いても仕方がない。

それでも涙はあとからあとから溢れてくるのだった。